

学生の主体的な学びについて

教授 酒巻 和子

はじめに

平成 23 年度のカリキュラム改訂以降、本学の教員はその実質的な運用について検討を重ね、学生が卒業までに獲得すべき「学習成果」についても議論を深めてきた。互いに連携しながら組織的に教育プログラムを展開することが重要であるという認識を共有している。学生が身に付けるべき能力は具体的にどのようなカリキュラムによって獲得できるのか、個々の授業科目はそのどの部分を担うのか、教員はこのことを認識してそれぞれの担当する授業科目を充実させ、その責任を果たさなければならないのである。

短期大学の学生にとって、2 年間のカリキュラムに従ってその目標を達成するためには、主体的に学ぶことは欠くことのできない姿勢である。本稿では、執筆者の担当授業科目のひとつである「作曲家・作品研究」において取り入れてきた、学生によるプレゼンテーションを検証しながら、学生の主体的な学びについて考察した。

1. 「作曲家・作品研究」と「西洋音楽史」

音楽芸術コース単独開講の必修科目であった「音楽芸術研究Ⅱ」は、もともと音楽を幅広く学ぶという当該コースの特色を反映させ、さまざまなジャンルの音楽作品を広く体験し学ぶための科目であった。重要な作曲家・作品をとりあげ、芸術音楽の鑑賞を通して、より豊かな音楽的教養を身につけることを授業の目的として開設したものである。クラシック音楽の名曲を実際にあまり聴いたことのないまま、音楽大学に入学して来る学生が増えてきた頃でもあった。感性豊かな年齢のうちに聴いておくべきと思われる作品を選び、毎回短い感想文も提出させて、曲名だけの知識に終わらないようにした。この科目は、平成 23 年度のカリキュラム改訂において「作曲家・作品研究」と名称変更し、音楽芸術コース以外のコースにも選択科目として開講して、現在にいたっている。

この科目は、より専門性の高い「西洋音楽史」への導入科目としての意味も含んでいる。多くの音楽大学で必修科目となっている「西洋音楽史」は、ヨーロッパ音楽の変遷を理解し、基本的な音楽用語についての意味とその時代ごとの変化を認識すること、各時代の音楽の様式的特徴を理解することを目標としている。演奏表現を主たる専門分野として学ぶ学生にとっても、必要な専門知識を獲得することのできる重要な科目である。しかし、通史として中世・ルネサンスから今や 21 世紀の現代に至るまでの音楽を年代順に扱う「西洋音楽史」は、毎回の授業で扱う内容も多い。学生の、入学前の音楽体験はさまざまであり、専門知識の基盤となる西洋文化や世界史に関する基本的な知識の差によって、当然のことながら理解度は異なるものである。本学においても、高等学校の音楽コースですでに西洋音楽史の基礎知識を学んで来た学生がいる一方で、普段はクラシック音楽をあまり聴かない学生もいる。「作曲家・作品研究」は、「西洋音楽史」では後期から扱う時代である

バロック時代の作曲家、作品から始めることによって、より親しみのある内容でゆつくりと西洋音楽史を理解するように授業計画を組み立てている。いわば「西洋音楽史」を学ぶための専門教養的な位置づけにあるといえる。

2. 「作曲家・作品研究」に取り入れたプレゼンテーション

「作曲家・作品研究」では、「音楽芸術研究Ⅱ」の頃から導入し始めたプレゼンテーションを継続した。学生参加型の授業として、発表形式のものは特に珍しくはないかもしれない。例えば、学部の上級学年や大学院の授業においても、特定のテーマで個人あるいはグループによる研究発表を課すことはさまざまな科目で行っている。ただ、大学での授業内発表を初めて体験する初年次の学生にとっては、そのことが学習意欲の向上につながるよう、失敗体験に終わることのないように注意した。授業の進行そのものを任せるのではなく、授業はあくまでもシラバスを中心に教員が進める。この科目でのプレゼンテーションの目的は、専門知識を自分のものとして確実に身に付けるとともに、コースを横断して広く周辺の専門分野にも教養的な知識を広げ、さらに学生同士の交流によってコミュニケーション能力などの汎用的能力を向上させることにある。カリキュラム改訂後、PDCA サイクルを応用して授業改善を図りながら実践してきたことは、以下のとおりである。

(1) 平成 23 年度

この科目が全コースに開講された平成 23 年度は、後期の授業内で毎回 1 名の学生を担当者として、授業の最初の 15 分程度をプレゼンテーションの時間とした。1 年次でも後期になれば大学生活とクラスの雰囲気学生に慣れて、少しでも互いにコミュニケーションをとれるようになっていたと考えたからである。取り上げる作曲家と作品は、あえて自由に選んでよいことにした。学生にとって、何を発表作品として選ぶかを決めることから課題は始まっている。夏休みの間に後期の発表準備をしておくことを課題として伝えた。この年の履修学生 11 人は全員 1 年生で、そのうち 10 人が音楽芸術コースの学生であった。それぞれクラシック音楽にもポピュラー音楽にも関心があり、副科実技でポピュラーヴォーカルを履修している学生もいた。ピアノ、声楽、器楽の複数の実技を同時に履修して学ぶことはこのコースの強みでもあったが、反面いずれも経験は浅いということも否定できなかった。発表する曲をクラシック音楽に限らないことに安心した学生もいて、クラシック音楽の分野についてはあまり予備知識がないことも確認できた。選択履修した電子オルガンの学生を含み、11 人の学生によって選ばれた作品は「表 1」の通りである。結果的には、選択されたのはいずれも有名な曲で、クラスの学生のほとんどが耳にしたことのあるものだった。授業当日は、それぞれ配付資料を用意してくる学生もいたが、ホワイトボードに作曲家と作品名を書くだけで話しを始め、早々に CD で音楽を流してしまう学生もいた。準備の仕方によってはもっと充実した発表になるはず、と思うこともあり、次へのステップのためには準備の仕方と配付資料の作成についてしっかり指導する必要があると思った。また、発表の後、質問をしたり、それぞれに感想を述べ合ったり、という時間を作ろうと

試みたが、これについても自分の意見をきちんと述べることに慣れていない学生が多く、おしゃべりの延長のようになって終わってしまうことが多かった。曲を自由に選択させることには特に問題はないと感じたが、次年度の課題として、発表後の感想をフィードバックする方法を考えた。

【表 1】 平成 23 年度の履修学生による発表曲目一覧

W.A.モーツァルト W. A. Mozart	レクイエム K.626 <i>Requiem K.626</i>	音楽芸術 1 年
F.ショパン F. Chopin	ノクターン 嬰ハ短調 (遺作) <i>Nocturne cis-moll Op.posth.</i>	音楽芸術 1 年
J.シュトラウス J. Strauß	美しく青きドナウ 作品 314 <i>An der schönen blauen Donau Op.314</i>	音楽芸術 1 年
S.ラフマニノフ S. Rachmaninov	ピアノ協奏曲 第 2 番 ハ短調 作品 18 <i>Piano Concerto No.2 c moll Op.18</i>	音楽芸術 1 年
M.ラヴェル M. Ravel	亡き王女のためのパヴァーヌ <i>Pavane pour une infante défunte</i>	音楽芸術 1 年
ザ・ビートルズ The Beatles	バック・イン・ザ・U.S.S.R. <i>Back in the U.S.S.R</i>	音楽芸術 1 年
サイモン&ガーファンクル Simon & Garfunkel	明日に架ける橋、いとしのセシリア <i>Bridge over troubled water, Cecilia</i>	音楽芸術 1 年
菅野 よう子 Yoko Kanno	タンク! <i>Tank!</i>	音楽芸術 1 年年
M.リパートン Minnie Riperton	ラヴィング・ユー <i>Loving You</i>	音楽芸術 1 年
坂本 龍一 Ryuichi Sakamoto	エナジーフロウ <i>Energy flow</i>	音楽芸術 1 年
I.ストラヴィンスキー I. Stravinsky	火の鳥 <i>L'Oiseau de feu</i>	電子オル ガン 1 年

(2) 平成 24 年度

平成 24 年度には、音楽芸術コース以外の 1 年生と、前年度に時間割の重複で履修できなかった 2 年生が選択履修した。カリキュラム改訂後 2 年目に、コースを限定しない選択科目とした成果が現れたわけである。授業時間の一部をプレゼンテーションにあてることは継続した。「表 2」の作品が選ばれた曲目である。学生たちにとっては、音楽の広いジャンルを再確認して、音楽とは何か、芸術とは何かを改めて見直す機会にもなっていたようだ。この年から新たに授業改善として行ったのは、発表時の配付資料を夏休み課題のひとつとして提出させることである。学生たちは要点を整理し、視覚的にも図版や表を利用してわかりやすくすることを実践的に学んだ。パソコンの技術も向上したようである。さらに、発表後に全員から感想コメントを提出させ、教員がそれを A4 サイズの用紙 1 枚にまとめてプリントして、次の授業時にフィードバックとして発表者に手渡すことも実施した。提出時には記名コメントとしたが、入力してフィードバックする原稿は無記名にした。発表に選ばれた作品を初めて聴いて感動したことや、曲は聴いたことがあったが成立のエピソードを知って感動を共感できたことが多く書かれていた。加えて、資料がわかりやすく工夫されていたこと、発表の声が聞きやすかったこと、などについても学生たちは適格

なコメントをしていた。そして互いにフィードバックを楽しみにするようになっていた。コメントを読んだ学生と周りの学生との間で話が弾む場面も見られ、反応があることは励みになる様子がわかった。発表の順番が早く終わった学生からは「もう 1 回発表する機会があれば、今度はもう少しうまくできるかもしれない」という声も聞こえた。他の学生の発表を受けて、自身の向上心につながったと思われる。次年度はひとり 2 回にプレゼンテーションの回数を増やすことにした。

【表 2】平成 24 年度の学生による発表曲目一覧

F. ショパン F. Chopin	練習曲 作品 10・12 「革命」 <i>Etude Op.10 No. 12 "Revolutionary"</i>	ピアノ 2 年
F. リスト F. Liszt	《3 つの演奏会用練習曲 S.144 R.5》より「ため息」 <i>Un sospiro</i> ～ “Trois études de concert” S.144 R.5	ピアノ 2 年
S. ラフマニノフ S. Rachmaninov	ピアノ協奏曲 第 2 番 ハ短調 作品 18 <i>Piano Concerto No.2 c moll op.18</i>	ピアノ 2 年
P. マスカーニ P. Mascagni	《カヴァレリア・ルスティカーナ》より「間奏曲」 <i>Intermezzo</i> ～ “Cavalleria Rusticana”	ピアノ 1 年
F. プーランク F. Poulenc	即興曲 第 15 番 「エディット・ピアフへのオマージュ」 <i>Hommage à Edith Piaf</i> ～ “15 Improvisations”	ピアノ 1 年
吉松 隆（編曲） Takashi Yoshimatsu	エマーソン・レイク・アンド・パーマー；タルカス Emerson, Lake & Palmer (EL&P)；TARKUS	電子オル ガン 1 年
P. チャイコフスキー P. Tchaikovsky	眠れる森の美女 作品 66 <i>Sleeping Beauty Op. 66</i>	電子オル ガン 1 年
J. ブラームス J. Brahms	交響曲 第 1 番 ハ短調 作品 68 <i>Simfonie No. 1 c-moll Op.68</i>	弦管打楽 器 1 年
S. バーバー S. Barber	弦楽のためのアダージョ 作品 11 <i>Adagio for Strings Op. 11</i>	弦管打楽 器 1 年
A. メンケン A. Menken	美女と野獣 <i>Beauty and Beast</i>	弦管打楽 器 1 年
P. モーリス P. Maurice	プロヴァンスの風景 <i>Tableaux de Provence</i>	弦管打楽 器 1 年
クイーン Queen	ボヘミアン・ラプソディー <i>Bohemian Rhapsody</i>	音楽芸術 1 年
E. モリコーネ E. Morricone	《海の上のピアニスト》より「愛を奏でて」 Playing love ～ “The Legend of 1900”	音楽芸術 1 年
ラッドウィンプス RADWINPS	愛し（かなし）	音楽芸術 1 年
バンプ・オブ・チキン BUMP OF CHICKEN	花の名	音楽芸術 1 年

(3) 平成 25 年度

平成 25 年度は、時間割上の必要もあり 2 クラス開講した。A クラスの履修者は、音楽教養 6 名、声楽 2 名、ピアノ 1 名、音楽と社会 1 名であった¹。B クラスの履修者は、弦・管・打楽器の意欲的な 2 年生 4 人を中心に、声楽と音楽教養の 1 年生各 1 名であった。

平成 25 年度のシラバスには、「作曲家・作品研究」の「学習成果」として以下のように

¹ 平成 25 年度、本学のコース改編により「音楽芸術コース」は「音楽教養コース」に名称変更した。また「音楽と社会コース」はシニア世代を対象としたコースとして新設した。

示した。

専門領域にかかわらず、音楽芸術に関する幅広い教養を深めることができます。また学生自身による発表の場を設けることによって、プレゼンテーションやコミュニケーションなど、汎用的な能力を養います。

この年度は、特に「能動的学修（アクティブ・ラーニング）」というキーワードを意識した。平成 24 年に中央教育審議会は「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて一生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ」（答申）を取りまとめ、新たな大学への期待として公表している。主たる内容は、授業時間の確保と授業外学習による単位の実質化と大学の質保証に重点が置かれているが、授業内容についても工夫を求めているものであった。特に以下の部分を考慮すると、このプレゼンテーションも、いわば本学の特色を生かしたアクティブ・ラーニングの試みといえるのではないかと考えたのである。

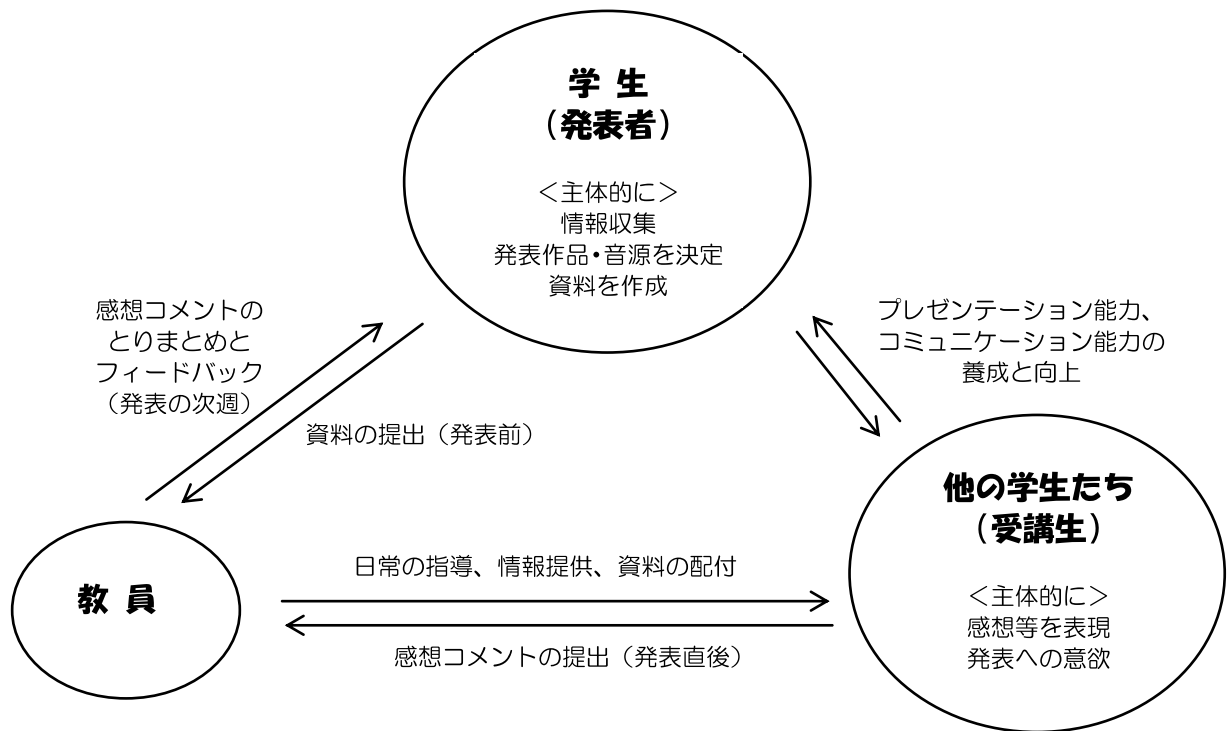
生涯にわたって学び続ける力、主体的に考える力を持った人材は、学生からみて受動的な教育の場では育成することができない。（中略）学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学修（アクティブ・ラーニング）への転換が必要である。（中略）学生は主体的な学修の体験を重ねてこそ、生涯学び続ける力を修得できるのである。（中略）学生には事前準備・授業受講・事後展開を通して主体的な学修に要する総学修時間の確保が不可欠である。一方、教育を担当する教員の側には、学生の主体的な学修の確立のために、教員と学生あるいは学生同士のコミュニケーションを取り入れた授業方法の工夫、十分な授業の準備、学生の学修へのきめの細かい支援などが求められる。²

プレゼンテーションについては、通年でひとり 2 回ずつ担当することにした。年度初めに以下の概要を説明し、前期と後期に各 1 回の発表を予告して準備を促した。

- テーマ：「私の感動した曲」あるいは「私のすすめるこの曲」。これまでに自身が体験した感動をもとに音楽作品を選び、他の受講生とその感動を共有する。発表と鑑賞を合わせて 15～20 分程度。
- 用意するもの（発表の前週の授業時に提出する）
 - ① 音源：原則として自分で用意する。図書館から教員が借り出す必要がある場合は、資料の請求番号を調べておく。
 - ② 配付用資料（1 枚提出）：原則として A4 サイズ用紙 1 枚に、作曲家、作品、簡単な紹介文や解説等をまとめる。当日、全員に配る。
 - ③ 読み上げ用原稿（任意）：発表のときに読み上げるつもりで、作文したもの。

² 平成 24 年 8 月 28 日 第 82 回総会（中教審答申）。この内容は詳細なデータ資料とともに公開されている。http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm

図版：発表者を中心としたプレゼンテーションのイメージ



全体のイメージを図版に示した。

授業前の準備として、学生はまず、発表する作曲家と作品を決めることから準備を開始する。その際、自分の音楽体験を振り返り、なぜその曲に感動したか、なぜその曲が自分にとって特別なものなのかを確認する。平成 25 年度の発表曲は「表 3」のとおりである。1 年生は高校時代の吹奏楽部の経験や入試で取り組んだ曲が印象深い作品であることが多く、2 年生以降は、入学後の体験を背景にして、できるだけ他の学生が選ばないような曲を紹介しようという意欲が高かった。

次に、授業で聴くことができるよう、資料を確認する。図書館のものであれば自分であらかじめ聴いておく。映画音楽や、演奏状況の視覚的効果を求めて DVD を選んだ学生も複数あった。自分で演奏してもよいことにした。平成 25 年度にはピアノの学生とフルートの学生の演奏を聴くことができた。フルートの学生は、学外で勉強している能管とそのユニークな楽譜を紹介した。

配付資料は原則として A4 用紙に 1 枚とした。定められた条件に従うよう取捨選択することにも、課題解決力が必要である。今年度の学生は全員、ワードによる作成ができた。文字の大きさや全体のバランスや配置を考えつつ、写真、楽譜、作品表リストなど、工夫されていた。原則として前の週の授業時に提出することとしたが、実際には事前指導はほとんどできないまま当日の朝に提出されることもあった。

授業の当日は、配付資料をもとに時間配分を考慮しながらプレゼンテーションを行う。読み上げ原稿については、事前に準備しておくことが望ましいと考えたが、当日、原稿なしで話を組み立てることのできる学生も多かった。発表後の質疑応答などについては、他

の学生との意見交換も早い段階で自然に行うことができた。少人数クラスで上級生も混在する落ち着いた雰囲気が、安心して話題に参加することのできる条件となったと思われる。発表者に対する敬意もそれぞれが抱くことができ、毎回の発表後には自然に拍手をするようになっていた。

発表終了後ただちに、他の学生は感想を執筆して教員に提出する。授業終了後、教員は発表に対する感想をワードで入力し、プリントアウトして、これを次の授業で当該学生にフィードバックした。感想を受け取った学生は自身の発表を振り返り、発表の意図が伝わったかどうかを確認するとともに、次の改善へと意欲を向上させた。

【表 3】平成 25 年度の学生による発表曲目一覧 (上段：前期、下段：後期)

A クラス

J. リヴィングストン、R. エヴァンス Jaery Livingston, Ray Evans	タミー <i>Tammy</i>	声楽 2 年
ザ・プラターズ The Platters	グレート・プリテンダー <i>The Great Pretender</i>	
アメイジング・グレイス、慈しみ深き友なるイエス <i>Amazing Grace, What a friend we have in Jesus</i>		声楽 2 年
J. ダウランド J. Dowland	リュート歌曲「さあ、もう 1 度」(スティング編曲) <i>Come again ~ Lute songs (arr. by Sting)</i>	
シューマン=リスト Schumann-Liszt	献呈「君に捧ぐ」S.566 R.253 <i>Widmung</i> S.566 R.253	ピアノ 1 年
F. ショパン F. Chopin	ノクターン 作品 27-2 <i>Nocturne op.27-2</i>	
菅野 よう子	花は咲く (作詞：岩井俊二)	音楽教養 1 年
E. グリーク E. Grieg	組曲「ホルベアの時代から」作品 40 <i>Holberg Suite Op. 40</i>	
C.-M. シェーンベルク Claude-Michel Schönberg	《レ・ミゼラブル》より「ワン・デイ・モア」、「民衆の歌」 <i>One Day More, The people song ~ "Les Misérables"</i>	音楽教養 1 年
熱帯 jazz 楽団	スウィングしなけりゃ意味がない <i>It Don't Mean A Thing</i>	
R. クレーダーマン Richard Clayderman	渚のアデリーヌ <i>Ballade pour Adeline</i>	音楽教養 1 年
大島ミチル	風笛 (宮本文昭：演奏)	
三澤 慶	フェニックス・マーチ	音楽教養 1 年
A. リード A. Reed	シンフォニック・プレリュード <i>A Symphonic Prelude</i>	
V. ヴァヴィロフ V. Vavilov	カッチーニのアヴェ・マリア <i>Ave Maria (Caccini)</i>	音楽教養 1 年
L. v. ベートーヴェン L. v. Beethoven	エグモント序曲 <i>"Egmont" Overture</i>	
H. ベルリオーズ H. Berlioz	《幻想交響曲》より第 5 楽章「サバトの夜の夢」 <i>Songe d'une nuit de Sabbat ~ Symphonie fantastique</i>	音楽教養 1 年
サイモンとガーファンクル Simon & Garfunkel	明日に架ける橋 <i>Bridge over troubled water</i>	
A. ブルックナー A. Bruckner	交響曲 第 9 番 ニ短調、テ・デウム <i>Symphony No.9 d-moll, Te Deum</i>	音楽と社 会 1 年
山田 耕筈 (作・編曲)	箱根八里は (奥田 良三：歌)	

B クラス

N. カプースチン N. Kapustin	8つの演奏会用エチュード op.40 より プレリュードほか <i>Prelude ~"8 Concert Etudes"</i>	弦管打楽器 2年
C. サン・サーンス C. Saint-Saëns	組曲《動物の謝肉祭》 <i>Carnival of the Animals</i>	
Ph. ウッズ Ph. Woods	アルト・サクソフォンとピアノのためのソナタ <i>Alto Saxophone Sonata</i>	弦管打楽器 2年
A. ボロディン A. Borodin	《イーゴリ公》よりだったん人の踊り <i>Polovtsian Dances ~ Prince Igor</i>	
W. F. バッハ W. F. Bach	フルート二重奏曲 <i>Duet for 2 Flutes</i>	弦管打楽器 2年
能楽囃子	中（ちゅう）の舞（能管演奏）	
M. イッポリトフ=イワノフ M. Ippolitov-Ivanov	組曲《コーカサスの風景》Op.10 <i>Caucasian Sketches</i>	弦管打楽器 2年
J. ウィリアムズ J. Williams	《ハリーポッターとアズカバンの囚人》 <i>Harry Potter and the Prisoner of Azkaban</i>	
M. ハムリッシュ M. Hamlish	《コーラスライン》より「愛した日々には悔いはない」、「ワン」 <i>What I did for love, One ~"A Chorus Line"</i>	声楽 1年
S. Sondheim	“Into the Woods”より	
山内 雅弘	架空の伝説のための前奏曲 吹奏楽コンクール課題曲	音楽教養 1年
木下 牧子	《地平線の彼方へ》より「春に」ほか	

3. 平成 25 年度の検証

授業内容としては、従来通りバロック時代から始めて年代順に作曲家と作品を扱うシラバスを示した。ただし「西洋音楽史」の履修を終え、音楽的経験も積んでいる2年生たちにとっては、この科目は、当初の目的とは異なったもう一步深い内容を期待されていることがわかった。本学のカリキュラムでは、1年次の「西洋音楽史」に続く科目として「オペラ史」、「鍵盤音楽史」、「器楽史」というジャンル史が用意されている。コース独自の専門的なものでは「ジャズ史」、「バレエ史」も開講されている。「作曲家・作品研究」は、それらと並んで、コースを超えて「音楽」の在り方を学ぶことができる科目として位置づけられるものであることも確認できた。

プレゼンテーションの部分について、平成 25 年度の授業最終日に、アンケート形式でその成果を学生に尋ねた。その結果、以下のような回答が見られた。

(1) 他の学生の発表から学んだこと

- ・ 普段自分が聴かないような音楽を知るよい機会になった。
- ・ 自分の専門だけでなく、幅広くいろいろな作品と出会えてとてもよかった。
- ・ 普段聴かないジャンルの曲（日本歌曲、ジャズ、宗教曲など）を聞いて多くのことを知ることができた。
- ・ 知っているつもりでも、歌詞の意味などを深く知って、さらに興味がわいた。
- ・ 曲の良さを共感しながら聴くことができたことが良かった。

- ・特に邦楽の譜面など、普段触れる機会のない資料を見ることができて興味深かった。
- ・さまざまなコースの学生と出会えてよかった。
- ・発表する人の、その曲が好きだという思いが伝わってきた。
- ・実際に演奏してくれて嬉しかった。
- ・発表の流れ、資料の作り方、曲の聴かせ方などに刺激を受けた。
- ・刺激し合いながら、これまでほかの人の発表する曲を聴いて、もっといろいろな種類の曲を探していきたいと思った。
- ・2年生の先輩の発表を聞いたり見たりすることができてよかった。

(2) 発表の体験から学んだこと

発表を準備することについて

- ・自分がその曲のどこに感銘を受けたかを再確認した。
- ・これまでは好きな曲を「聴く」だけだったが、発表のためにいろいろ調べてみて、聴くだけではわからなかったことを知ることができた。
- ・自分なりにパソコンを使って資料を作成し、どうすれば相手に伝わるかを考え、発表する力が少しだがついたと思う。
- ・どうすれば見やすいプリントになるか、CD を流してこの解説を入れようか、など、いろいろ考えながら発表した。
- ・自分の好きな曲を調べていって、作曲家についても学ぶことができた。
- ・楽譜や表があるとわかりやすくなると思った。
- ・作品のすばらしさをより深く感じた。

発表当日について

- ・少し照れてしまうなどがあったが、音楽を通して仲良くなれたのが、少し成長したところだと思った。
- ・もっとスムーズに話すことができればよかったと思う。
- ・最初は緊張したが、自分の発表を楽しんでもらいたいと思い、頑張ることができた。
- ・改善点はもっと話をまとめること。
- ・人に何かを伝えるのは難しいと思った。
- ・普段から表に出ることが苦手だが、人前で音楽について話したい、という気持ちに変わってきた。
- ・人の前に立った時に力を出せなければ伝わらないと思うので、作ったプリント以上のことが話せるようになりたいと思った。
- ・人前で話すことは得意ではなく、緊張する。改善できるよう、努力していこうと思う。
- ・発表するときにはもっとそのことについて調べておくことがいいと改めて実感した。
- ・もっと知識を深めて質問にもちゃんと答えられるようになりたい。
- ・他の人に比べて発表の情報量が少なかったと反省している。
- ・相手の目を見て話すことや、実際に楽器を出してみたりしたので、自分なりに工夫してできたと思う。
- ・2回目は1回目より良い発表ができたと思う（同様回答多数）。

今後への意欲その他

- ・音楽は人を感動させることができる力を持っているという原点にもう一度立つことができた。
- ・これからの演奏会や面接での自信につながった。
- ・口頭で適切に伝えられるようにすることで、その力をもとに、演奏を通じて他者にメッセージを届ける力を養いたい。
- ・他の曲についても調べてみようと思った。
- ・人前で発表することは、聴く側とまったく違う。伝える側の立場になることによって、聴く姿勢についても考えるようになった。
- ・発表の経験は、音楽の演奏だけでなく、これからの人生においても良い経験になった。役立つときが必ずくると思う。

まとめ

「教員にはそれぞれの授業において学生の知的・人間的能力を開花させる質の高い教育を展開する責任がある。学生がその潜在的能力を眠らせたまま大学を卒業してしまうことは、当該学生にとっても、社会にとっても大きな損失」である、³ と前述の答申でも述べられているとおり、教員には、学生が学習意欲を高めて主体的な学習を確立するために、各授業科目の内容・方法の改善に取り組むことが求められている。

「作曲家・作品研究」の授業を通じて、本学が目的とする学習成果の中でこの科目が果たすことのできる役割を確認することができた。初年次の学生に対しては「広く浅く」という専門教養のための授業であると同時に、2年次の学生に対しては「広くかつ深く」さらには生涯学習につながる興味の持続と研究の方法を身に付けることができる科目であることを確信したところである。この授業を改善しながら学生の主体的な学びの習慣を促進させることができれば、教員の社会的責任を果たすことにつながるのではないだろうか。

³ 中教審答申；本文 p.20